郷土かみのかわの歴史・文化財

町指定文化財　石幢（せきどう）

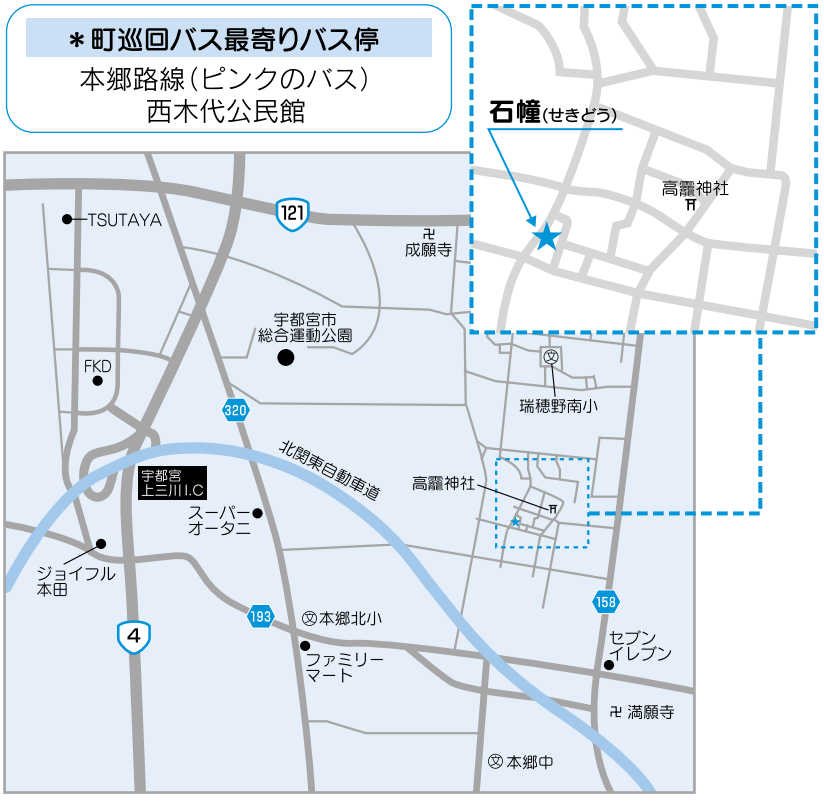
お寺に立ち寄ると、石で作られた様々な塔を目にします。亡くなった方の供養を目的とした五輪塔や宝篋印塔、密教とのかかわりが深い多宝塔、卒塔婆の一種として作られた板碑などなど。これらは時代や地域の違いによって流行があり、形に変化が見られます。この背景には、当時の社会が大きく影響している面もあり、歴史を語る上で重要な資料の一つになります。今月紹介する西木代の「石幢」もなじみはあまりありませんが、石塔の仲間になります。

石幢は鎌倉時代に中国から伝えられたもので、日本のものは中国のものとは異なり、塔身に笠を載せたものがほとんどで、石灯籠のような形をしています。また、中国では塔身が八面であるのに対して、日本のものは六面で、それぞれの面に地蔵を刻んだものが現れるなど、民間信仰的な作品が作られるようになりました。西木代の石幢も地蔵を刻んだものなのです。

西木代の石幢が作られた背景には、六地蔵信仰と呼ばれる信仰の流行があります。六地蔵信仰の「六」という数は、六道つまり地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六つの世界を意味しています。平安時代に死後、六道を転生するという「六道輪廻」の思想が広まると、この六道全てで救いの手を差し伸べる、地蔵菩薩に対する信仰が始まりました。そして時代が下り室町時代になると、六道に一体ずつ地蔵を配した「六地蔵信仰」が盛んになるのです。昔話で有名な、笠地蔵に登場する六体のお地蔵さんも、これに由来します。現在でも墓地の入り口に、六体のお地蔵さんが静かに佇んでいる場所を、目にすることがありますが、これは六道に旅立つ死者を守るためと言われています。

西木代の石幢は、町指定文化財の薬師堂が立つ敷地の一角にあります。現在は残念ながら下の部分が失われており、高さも当時とは異なります。しかし、塔身には六体の小さな地蔵が刻まれ、江戸時代よりも前に、この地域にも六地蔵信仰が根付いていたことがわかります。この石幢が盛んに作られた時代は、人々の生活が楽ではない動乱の時代でした。せめて死後に、苦しむことなく過ごせたらという切なる願いを、郷土の先人たちはこの石幢に込めたのでしょう。

現在、下の部分が失われています。

塔身に刻まれた小さな地蔵。

＊町巡回バス最寄りバス停
本郷路線（ピンクのバス）
西木代公民館